

「夢を実現する方法」——今回の研修で学んだことをまとめるならばその言葉になる。さまざまな先達者から、私たちの進むべき道、すべき最低限のことを教えていただいた。

今回の1泊2日の経験は、一生忘れることがないと思う。そう思えるくらい、心に残ることが多かった。

初日のディレクトフォース。まず最初に、田中伸夫前 IEA 事務局長からお話をいただいた。IEA というのは、国際エネルギー機関で、特に石油エネルギーのことをあつかうことが多いそうだ。OPEC(石油輸出国機構)は名前の通り石油の生産についてを決める機関だが、IEA はそれとは違い、主に消費について扱っている。市場が混乱しないようにするのが目的だそうだ。特に私が興味を持ったのは、日本の問題についてである。日本国内の周波数は東日本と西日本で異なっており、東日本大震災の時、関西で作られた電気を東日本で使うということが出来なかった。結果、計画停電という事態に陥ってしまった。もし 50Hz か 60Hz のどちらかに統一していれば、停電になるなんてことはなかったのだ。しかもそのことは、日本政府に IEA から事前に勧告していたらしい。それをやらなかったのはお金や時間がかかるという理由なのだろうが、早急にやるべきであると感じた。そして、福島第 1 原子力発電所の事故がクローズアップされて取り上げられていたが、ほかに津波のきた宮城県の女川原子力発電所などのいくつかの発電所は津波が来ても対応できた。その差は何だったのかというと、事前に対策出来ていたかどうかの差だった。他のところはやや高く工事したところに建設するなどの工夫をしていた。ちょうど工事したてだったところもあったそうだ。

これら二つのことから言えるのは、原子力の事故は人災だったということである。ということは、人次第で防げた事故であったということだ。

その話から私はふたつの事を考えた。一つ目は、想定し得る最悪の状況においても失敗しないように、事前に対策をねっておくことが必要なことだ。これは事故だけではなく、普段の自分自身の生活にも反映させねばならぬところである。例えば、私はやらなければいけないことを後回しにしてしまう癖がある。しかし、それは風邪をひいたり急用が入ったりする場合、やらなければいけないことができなくなる可能性がある。そういうところまで考えて、早めにやるべきなのだと感じた。

二つ目は、人の言う事は素直に聞くということだ。政府が勧告を聞かなかったばかりに、停電という事態に陥った。無論仕方ない側面もあっただろうが、それでも防げたことであるはずである。だから私も、両親や先生、友達の言うことも、たとえ反抗心を感じるがあったとしても一旦は素直に聞き入れ、実行してみることが大切であるかなと思った。

その後は、グループごとの質問に移った。まず村上さんにお話をうかがった。村上さんは、早稲田大学法学部を卒業してさらに大学院で国際法について学び、その後外務省の経済連携課で EPA(経済連携協定)や TPP(環太平洋パートナーシップ協定)などに携わったそうだ。また、そこでは太平洋の島々の国々への ODA にも関わったとおっしゃっていた。その後は生物多様性の保全・開発を笹川平和財団の方で行っている。初めと後の仕事で、内容が全く異なっているように感じたので「全く違う職への取り組み方」を問うたのだが、村上さんいわく、違う仕事をしてき

たという意識はあまりないらしい。

村上さんは高校生時代小説家を目指していた。だが、大学で司法を勉強して、「世の中のお金のある国からお金のない国にお金流れ、格差をなくす」ような仕組みを作りたいと感じ、それがいまの大きなテーマになっているそうだ。だから、違う仕事だと感じにくいのかもかもしれない。

私達もそのような人生を賭けられる大きなテーマを見つけたいと思った。村上さんは、社会に出たら正解のない問題に取り組まなければいけないので、いろいろな考え方を身につけて、人生の大きなテーマを見つけなければならないとおっしゃっていた。特に本をいろいろ読むことが、それにつながるという。

いろいろな考え方を身に付けるー私は数学にその片鱗を見る。数学では、ひとつの答えにたどり着くまでにさまざまな解き方がある、と言われていた。そのために私たちは、答えにたどり着くために、さまざまな公式や手法などの「道具」を覚える。図やグラフを使ったり図形の考え方を関数に使ってみたり。年齢が上がるにつれて抽象性が増していくのはいろいろな問題が対処できるようになるため。

そう考えると、数学でやっているそのことを、日常生活にも応用すればいいのだと思う。しかし、数学とは違い、先生が一々解説してくれる訳では無い。自ら、学びに行こうとする意志が必要とされてくるのである。見て盗み、聞いて盗み、読んで盗む。そのようなことが必要になってくるのかなと思った。

そして、大きなテーマを見つけること。それも難しいことだと思う。人生をかけられるようなそんなテーマはなかなか見つかるものではない。私は読書がとても好きで、しかも濫読する方なのだがそれでもそんなテーマはまだ出会っていない。しかし、恐らく受動態でいるのではなく、能動的に自分から本に働きかけないと、そんなテーマは見つからないのだと思う。本から教えてもらうのを待つのではなく、自分から興味を持ちに行く。この姿勢が大事なのかもかもしれないと感じた。

次にお話をうかがったのは青木さんだ。さまざまなリーダー職に就いてきている方で、日本データクラフト社長、日本シーベル社長、日本アイビーエム取締役などを務めている。

そんなものすごいお方から伺ったのは私たちの人生をより良くする方法についてである。まず学生とは、社会への順応期間だそうだ。青年期が大人になるための猶予期間であるという、倫理の授業を思い出した(全くの余談ではあるが。)私達の時代のキーワードは「グローバリゼーション」と「テクノロジーの変化(情報コミュニケーションツール)」、そして「少子高齢化」だそうだ。宮城にもたくさんあるスーパーマーケット西友は、もう既にアメリカの会社になっている。それは一部の例に過ぎず、グローバリゼーションでそのようなことが起こりやすくなっている。

そして私達がやらなければいけない事は

- ①夢中になれることを探すこと→自分のことを知り、様々な感情を体験すること
- ②五感の体験→現実を直視すること
- ③知識よりも「why?」→なぜと問いかける心が大切だという。

夢中になれることーこれは前述の村上さんのときの「人生を賭けられる大きなテーマ」と通づるものがあったと感じた。ただし、それを本に求めるのではなく、あくまで哲学的な、自分自身の体験によるものが違いだろうか。やはり今のうちは様々なことに関心を持ち、積極的に挑戦してみることが大事なのだと感じた。そして五感の体験。これは現代ならではの話だと思う。パー

チャルな世界で疑似体験ができてしまうような今だからこそ、現実に触れ、現実から逃避してしまわないようにすることが重要なのだと感じた。今の若者は責任感が薄いという言葉聞く。これは個人的な意見だが、現実逃避もその原因の一端を担っていると思う。そして「why」の精神は、言うまでもなく様々な場面において必要とされる。好奇心はさまざまなことを知るのにとっても役立つ。もちろん知識がないと疑問は生まれないと思うが、知るのではなく考えることが社会に出てからも必要とされる能力であると思うので、私もそこを鍛えていきたいと思う。

そして青木さんは、ぶれないように努力することが重要だとかたった。自分の考えを信じ、一生懸命やり抜くことが必要なのだと強く思った。

今回は、さまざまな人の話を聞くことに恵まれた。普段なら絶対話せないような立場の人ともたくさんお話できた。その貴重な体験、そして、それから自分で考えたことを元に、これから自分の人生を歩んでいきたいと思う。

そんな話をしてくださって方にはいくら感謝があっても足りない。本当に私たちのために時間を作っていただき、ありがとうございました。